信州アカシア林住期 その一

見えない春風

夫馬　基彦

三月一日はバネ指記念日である。

バネ指というのは手指のどれか（複数の場合もある）が過剰使用の結果、第一または第二関節が「く」の字状に曲ったままになることだ。曲った部分は無理に伸ばそうとするとピンと音立てるようにして今度は伸びきりになり、痛いのを我慢して曲げるとまた「く」の字になってしまう。この「く」の字、ピン、の関係がまるでバネのようだというわけである。

私のバネ指は左の親指で、去年の三月一日からそうなったのだった。理由は開墾のせいである。

開墾というといささか大袈裟感があるが、しかし私の実感としてはそうだ。なぜなら、私が一昨年の一月末から住みだしたこの土地は、ゆるい斜面に樹高二十メートルくらいのアカシアや楢などが林立する自然林だったからである。

つまり人間の手が入ったことはろくにないし、まして畑とか庭であったことは一度もない。なのに私はそこへ、小さくてもいいから畑を造りたいと一念発起したのである。そのためにはまずは灌木類を伐り払い、ついで地面を掘っては根や石なぞを取り除いていくしかない。それで私は、この地での四季の様子・日照具合などがだいたいのみこめた一昨年の十二月半ばから始め、昨年二月の末日まで開墾作業に邁進したのだった。

その間、私は本当に連日汗にまみれた。土地は元来浅間山の火山弾地だから掘ればすぐ石にぶつかる。鍬ではカチンと音たてて跳ね返されてしまうのでスコップを使うのだが、石は実に沢山あって、無数と言っていい小石から、てのひら大くらいのもの、更に大きくなって最大は足腰を踏ん張ってもとても一人では抱え持てない縦三十横四十センチ以上のものまであった。半分ほどは軽石状だったが、どういうわけか大きくなっていくにつれずしりと重く硬い種類になっていくから、てのひら大のものでも片手で持つと時に手うでがグッと下ったりした。それをスコップを右手で持ったままなるべく左手だけで取って脇へ投げるので、どうしても左手の方に負担がかかる。

そういう作業を丸二カ月半続けた。この作業は午前のまだ寒い時間に始めても一時間もすると汗ぐっしょりになるため、二、三時間精を出したあと切り上げ、シャワーを浴び下着を着替える。それが爽快で、かつ一カ月もしたころから長年の腹の出っぱりが明らかにへこんでいったため、私はわざと汗を望みさえしたのだった。

そして三月一日をもってぴたりとやめた。

理由は左手の親指がひどく痛んで完全に動かなくなったからである。無理に動かそうと

しても今度は第一関節から先が曲ったまま動かない。実はすでにしばらく前から予兆はあり、親指の動きが次第に悪くなって痛みも感じていた。なのに予定した畑がもう少しで出来上りそうだったこと、北側隣家の雲笠さん宅との間の道の雪融けぬかるみを、開墾で出た多量の砂利石類で埋めたかった、の二点のため、もう少しもう少しとついやりすぎてしまったのである。雲笠さんがこの地での一番親しい隣人である上、ぬかるみは我が家を建てたため日当たりが悪くなったせいだとの思いもあった。いずれにせよ、このせっかちさというか、何ごともキリをつけたがるのがかねての私の悪癖だった。

病院整形外科での診断結果は、「しっかりしたバネ指(一体こういう表現はあるのだろうか)により、出来れば手術が必要」、というものだった。手術は親指の付け根あたりを二センチほど横に切り、中の腱鞘を切り開くというのである。

私は愕いた。そんなに大ごとなのかの思いと共に、いきなり「切る」という判断に何か解せぬ思いを抱いたのである。医師がどうやら私を農民と勘違いしたらしく「長年の結果ですから」とか「これが近代医学のやり方です」なぞと、したり顔に言ったのも気に入らなかった。私は長年ペン以上のものをろくに持ったことのない身であり、手を見れば農民か否かくらい分りそうなものだと思ったし、近代医学も「すぐ切ったりする」べきではないと考えていたからだ。結局私は親指付け根へのステロイド剤注射を選び、この日と一週間後に二回した。これは太い針をぐさっと突き刺す相当痛い注射だったが、私にとっては切るより良かった。

それにしても、このばね指のため私の行動形態は大幅に変化を余儀なくされた。まず、もちろん開墾だの、折角ほぼ出来上った畑での農作業もできなくなった。左親指は絶対安静であり、何より全く動かなかった。茶碗も持てず、歯ブラシも持てなかった。たった指一本なのに親指というものはいかに重要なものか、これが使えないと実質片手であることも強く認識させられた。車の運転もちゃんとはできない。左手ではハンドルを掴めず人差し指以下を添えるだけになるので、カーブはうまく回れず、咄嗟の動きが鈍くなるのだ。私はここへ引っ越して以来一番の生きがいになっていた庭仕事畑仕事を封じられ、温泉など近在への車行も自分ではできなくなった。

おかげで私は去年の三月一杯は庭も界隈もただそっと歩くだけで、大半は家の窓からじっと外を眺め続けるだけだったのである。折角へこんだ腹もそのうち殆ど元に戻った。まことにばね指一本恐るべし、である。

指はだんだん回復していったが、一年後の今も少しは痛く、歯ブラシのチューヴを気にせず親指で強く押せるようになったのはつい最近のことだ。庭仕事畑仕事は少しづつだんだん出来るようになっていき、夏の間は右手中心でトマトや茄子、きうりなど多少の野菜は作り、秋以降は左手もある程度使って蕪、玉ねぎ、エシャーレットなぞを作ったりしている。けれどもその間一番多くなしたことと言えば、木々や草々、その成長と枯れゆくさまなどをただ見つめて過ごすことだった。

そして思えば今日が、そのバネ指丸一周年記念日という次第なのである。

ここらでは三月の声を聞いても実質的にまだ冬なのだが、殊に今年の冬は地元の人も驚くほどの寒さだった。だいたい去年は夏が随分暑く長く、

「今年はいつまでも暑いだ」

「ほんとにねえ」

と言い合ったのに、短い秋をはさんで冬になったと思ったら今度はどんどん冷え込み、年が明けて一月二月になるにつれ雪が何度も降ったのである。気温もそれにつれ下がり、明け方前は零下十度から最低は十三度、日中でも最高温度が零下のままという日が幾日も続いた。

それでもその積雪がようやく融け、丁度三月に近づいた頃から、空気はいくぶん柔らかくなったのだった。で、朝食後、書斎で朝のメールチェックやネットの点検等を済ませると、そのまま何か原稿類を書き続けたりするより、ともあれ外へと自然にゴム長靴をはいて玄関を出てしまうのは、要するに寒い冬のあとの春の芽吹きが実に心楽しいものだからである。実際、朝起きるとともに、さあ今日はどんなふうに芽が伸びたか膨らんだかと、わくわくするのだ。

真っ先に向かうのはリビングから正面に見える、家の建物より一メートル半ほど斜めに下った平（ひら）地で、そこには先月来芽吹きのトップを切っている水仙が三十本ほども群生している。それが今日三月一日はどのくらい伸び、どんな色になっているか。遠目には濃いグリーンの爪か指先集団みたいに見えていたのが、近寄るにつれところどころ黄色があったり、先が二つに割れていたりするのが分ってくるのだった。二つに割れた芽の間にはやがて花の蕾が出てくるはずだ。

私は慎重に目配りしながらゆっくり更にあたりを見まわっていった。二年前の三月、門扉や塀柵作りのさい伐った大きな樹木の幹や太枝を切り揃え三角形に積み上げた周辺に、師走ごろクロッカスの球根をだいぶ埋めておいたので、ぽつぽつ芽が出ないかと気になっている。だが、足や手で落葉をかき分けてもどこにも気配はまだ見えない。

斜面の一番下の柵ぎわが畑で、そこだけちょっと妙な景色になっている。畝に落葉をこんもりかぶせてあるからだ。それは前回の今冬第一の大雪―といっても積雪は三十センチほどで、信州でも北部の多雪地帯と比べれば大したことはないのだが―の際、あまりに雪が寒そうな気がして、私が畝から作物の上全体に落葉を撒いて布団代りにしてしまったためである。それはまさに素人の発想そのもので、近所のどの畑を見まわしても決して見当たらぬ、相当風変りにして独創的な光景であろう。

その落葉の布団を私はもういいだろうと畝の上だけ払って歩いた。畝の上部は黒い土を現わし、そこに一定間隔をおいてジャーマンアイリスや玉ねぎの短い緑葉がやや霜枯れ気味に顔を覗かせた。南二畝に西一畝。北の畝はさすがにまだ何も芽生えていない。

十日もたつと、この「古城のほとり」はだいぶ変るかと思いきや、あまり変らない。ここはあの島崎藤村の、

「小諸なる古城のほとり、雲白く遊子悲しむ」

の小諸城址、今は懐古園の裏口から歩いてほんのすぐの地だ。詩はこのあと、

「緑なすはこべは萌えず、若草も藉（し）くによしなし、

しろがねの衾（ふすま）の岡邊、日に溶けて淡雪流る」

と続くが、日本列島はこの十日間にも二度寒波に見舞われ、我が小諸もしばしば雪が降った。雪は自宅敷地にもむろん降り、落葉の上にもあの水仙の芽の上、折角私が払って黒土を出してやった畑の畝の上にも白い衾となって覆い、一面を銀世界にした。そしてその雪も晴れた今日の陽で正に溶け初（そ）めている。藤村先生、まことにうまい。分りやすく愛唱性があるし、落梅集発行から百六年を経た今でもちゃんとここらの春の実相に合致している。それだけ昔は今年の寒さ並に毎年寒かったのかもしれない。

我が家は標高約六五〇メートル、ほぼ全市が浅間山の傾斜上にあるとも言える小諸ではむしろ低い方だが、東側はだんだん高くなっていく坂道の住宅街につながり、西側は柵の外の幅三メートルの土道を越えればもう森の入口である。入口には桂・桜などの観賞木も目立つけれど、その先の径はもう完全に山道というか急な斜面林の細い落葉道で、「野鳥の径」とか「千曲川への径」と名付けられた両側は鬱蒼とした自然林だ。

私は久々にその径を歩きだした。まだ所々に雪が残っている径は踏み出す長靴にサクッサクッと音を立て、かつ春の雪の特性の重い湿り気ですぐ長靴が濡れ、中まで冷えてくる。

斜面一面の木々は九五％枯れている。灌木などに少しは常緑樹があるのと、右手下方に孟宗竹が群生して風にゆさゆさ揺れているほか緑はない。だから夏には決して見えない風景が木々の間から見下ろせる。まず最初が段々畑。今は黒とやや白茶けた土色だけが広がる。

夏から秋には菊畑が多かった。右手には蕎麦畑も少しあったか。夏には蕎麦の白い花、秋口には菊の赤や黄の蕾が香りとともに広がって、私の好きな場所だ。ただし、それらを見るには径を何度もつづら折りして下の道まで降りねばならない。段々畑の下は棚田だ。

そうしてその一番下が千曲川である。名前の通りくねっていて、ここから見るだけでも二度大曲りし、左から右へと流れてゆく。左にはダムがあり、そこから白い放水が一部だけ下に落ち、あとは岩石の露呈した浅い水面となる。そこは小諸市で一番標高が低い地帯のはずで、こうして見下ろすと一五〇か二〇〇メートル下になるのだろうか。小諸は全国で一番高低差の大きい市だそうで、一番高い場所は浅間山頂上部の約二五〇〇メートルである。してみると眼下のあの川面は一体標高何メートルなのか。私はゆっくり眺めおろし、それから視線をまっすぐ上にあげた。対岸はほぼ垂直に近い急峻な崖で、今私がいるこちら側よりやや高めの山の印象だ。その上部は御牧ヶ原と呼ばれる台地である。昔は御料牧場が広がり、馬が駆け巡っていたらしい。

私は径を三折れくらいしたところで足をとめた。足先がかなり冷えてきたうえ、前方に雪がかなりあること、それに時おり下から吹き上げる風がひどく冷たかったからだ。のんびり森の径を下まで降りて行くにはまだ少し早い季節らしい。

私は木々に少しは春の芽が膨らんできていないかに注目しながら、径を戻り始めた。木は平均二〇メートルほどの楡類とアカシアが一番目立つ。ほかは赤松や欅、栗などだ。アカシアは正式にはニセアカシアで、明治期あたりに入ってきた外来種らしいが、地質が合ったのかこの界隈の斜面や懐古園周辺の谷間では随分繁茂している。下の河川敷や岸にも多く、ダム下流の中の島は全島アカシアで占められているので、私は勝手に「アカシア島」と名付けた。

アカシアはこのあたりでは五月半ばあたりから薄緑の柔らかい葉が豆の葉状の丸い連葉を増やしつつ伸びだし、みるみる葉も枝も広がっていく。そして五月下旬頃から白い、やはり豆の花みたいな花房を垂らし始め、やがて六月には甘い香りをあたり一杯に放つ。この香りは本当にほの甘く、微風に乗ると三〇メートルほど先まで柔らかに包む。アカシアの花は食べるとまたうまく、ごく初期のころなら花房そのまま、あるいはサッと湯がいてサラダにしたり、天ぷらにしたりする。私は揚げ物はあまり食べないのでもっぱらサラダにしたが、それはシャキシャキと口あたりよく甘やかで、まさに初夏の味そのものなのだった。

私はその匂いを思い出しつつ径を上り、我が家の敷地に戻った。ここも元はといえば斜面林に続く同じ植生の土地柄だから、敷地内で一番多いのはやはりアカシアの木である。去年三月、塀・門扉工事の際、老朽化したアカシアの大木類や立ち枯れた中木を計数本伐採したため、鬱蒼とした印象はなくなったものの、それでも残ったアカシアは大小合わせ十数本あるから、桑の数本と比べても圧倒的に多い。よく「庭には主木がある」という言い方をするが、我が家の場合、位置から言って主木は胴周り一メートル八十センチほどある桑の古木となろうが、数と存在感、それに印象として「アカシア林の家」であることはほぼ間違いない。

実際、私は一昨年去年とこのアカシアの花の香に包まれ、アカシアの花房と若葉のサラダを食べた初夏から、すっかり緑濃くなる盛夏までの一カ月ほどは、汗ひとつかかぬ爽やかな気候と合せまことに至福といっていい気分だったのである。

「早くアカシアの芽が吹かぬものか」

私は濡れた長靴の先を少し拭うように落葉の中に突っ込んでは、アカシアの木々を見て歩いた。枝の先には確かにいくぶん朱らんだ膨らみが目につくものの、よく見るとそれらはほぼ同じ場所にある鋭く尖った棘の方が大きく、まだまだ芽にはなっていないのだった。少し雲が出て日が陰り気味の気温は、おそらく零度近くにまで下っている気配だった。

大地震が起ったのはその翌日だった。震源地は東北地方の三陸沖だったが、型破りの規模で、小諸でも随分揺れた。二階書斎の机やパソコンが音をたてて揺れ、電灯が振り子のように往復した。だが、六、七分で収まると、あとは何事もなさげに静まった。余震は一時間に一度くらいの頻度で続き、翌日未明には長野県内でかなり大きな別の地震まで起ったが、飛び起きるほどではなかった。テレビやネットでは海岸地方の津波被害の大きさが刻々伝えられたが、海のない内陸、それも大きな山に囲まれた林の中では、烏の鳴き声や上空を滑るとんびの方が目立つくらいだった。

時がたつにつれ、海岸地方では町ごと津波にのみこまれて壊滅したり、万を超える死者行方不明者が出ている実情が次々に明らかになっていき、あまつさえ破壊された原子力発電所から放射能が次第に広がり始めている様子が伝わった。

私はそれらの映像や情報に接したあとはたいがい外へ出た。テレビの報道によって生じた憂鬱と苛立ちから逃れるためだ。憂鬱は悲惨の大きさから生まれ、苛立ちは見えない放射能への恐怖と電力会社や政府関係者たち、報道担当者の物の言い方などへの齟齬感から生まれる。いや、もう一つ、いくら見ていても、考えても、おのれには何もしがたい、為し得ないという無力感もある。

外へ出てみると、木々や草、落葉や土があって、急に優しい。大半が枯れた世界なのに、そこここには水仙やイヌフグリをはじめ小さな緑がちゃんと一日分は伸びており、木の芽もつつじや杏、桃、野いばら、ブルーベリーなどが明らかに少しづつ膨らみつつある。私はそれらを眺め、触れ、生命を感じ、春を感じた。周りが静かなだけに遠い地方の出来事が万て嘘のようだった。私は畑を耕したくなり、落葉の衾を払ったあとの畑にせっせと鍬を入れた。去年からあった畝を崩し、畝間だった場所に落葉を詰め土をかぶせ、小石を除き、少し位置を変えて新しい畝を作った。畝幅は去年より広くした。何か新しいことをしたくなるのだ。植えるものもまだ考えてはいないが半分は新しいものにしたい。変化が希望と楽しみだ。

私は翌日も北側の畑を耕した。こちらは畝幅を広げるため少し開墾もどきもした。今まで畑ではなかった所に鍬を入れ、少し畑に繰り入れてゆくのである。また石がいっぱい出た。小石のほかてのひら大のものもある。

私は往昔来何度かあったという「浅間大焼（やけ）」とか「浅間山大変」のことを想った。今でいう大噴火だが、天明の大焼けの際なぞは軽井沢一帯に二メートルもの灰や焼け石が降り積もって村々は潰され、江戸でも降灰で昼間に提灯が必要なほど暗くなったという。上州側の北麓にある鎌原村は一瞬のうちに火砕流にのみこまれ、ほぼ全滅したそうだった。南麓側の小諸界隈はどれほどの被害だったか確とした記録はないが、こうして土を掘るたび現れる石の量や所によって層をなしている薄赤い砂地を見るにつけ、天から降った焼け石や灰の凄まじさはよく分る。火の降る恐ろしさと津波の恐ろしさ、どちらもまさに大変だったろう。だが、放射能の恐ろしさはいささか違う気がする。何しろなにも目に見えない。音も熱も匂いも触れうる物も何もない。妙なものである。こうなると焼け石であれせ

めて目に見える物の方がいいような気がしてくる。
　そんなことを思いつつ、私は大きな古き焼け石を右手で拾っては脇へ投げた。まだ左手を使うのが怖いのだ。けれど一方で、鍬をふるったり畝を作る分には左手はもはや殆ど支障もなく、もう九〇％以上回復したかと少し嬉しい気分も生じるのだった。
　次の日、私は新しい畝に消石灰を撒きたくて、車で近くのホームセンターに向った。石灰は土壌をアルカリ性に改良するのに必要なのだ。この日は前夜来また寒波が来ていて空気は冷たかったが、日差しだけは暖かげだったので、私はテレビの前を離れたのである。テレビは福島県の原発建屋が相次いで爆発して壊れ、周辺の放射線量が飛躍的に増えたばかりか放射性物質が拡散した可能性ありと知らせていた。
　そのホームセンターの前庭で、私は消石灰より先に、桜草などの草花の脇に一群の苗木類があるのを発見した。そこは一昨年の三月、染井吉野の苗を見つけた場所と同じである。私はそこへ吸い寄せられるように近寄り、すぐに枝垂れ梅とグミの苗木を見い出した。どちらも高さ五〇センチほどの小さなものだが、枝垂れ梅は早くも白い蕾をつけており、グミも芽吹いてわずかに葉の形を見せ始めている。梅もグミもかねて欲しかった木であった。どちらも花の香りがよく、実も生る。グミはあまり知られていないが花どきは何ごとかと思うほどかぐわしい甘い香りがあたり一帯に立ち込める。梅は枝垂れより徒長枝（ずわい）が真っ直ぐ上に伸びる普通の種目がよかったのだが、この場にはなかったし、なによりすでに蕾がほころぶ寸前に見えたので、私はためらいなく買うことにした。小諸界隈では春の花が遅く、梅も桜も桃もほぼ同時に四月中旬以降咲きだすのである。なのに、もうすぐ梅の花の香をかげるとはと、私はあと先も考えずすっかり浮きたったのだった。
　帰宅するや私は直ちにそれらを植えた。売り場で出会った他の客が「すぐは植えない方がいい。寒さが去るまで土間にでも置いとくといい」と言ったが、私はテレビのある屋内になぞ入りたくなかったし、なんだか梅の香が放射能を追い散らしてくれるような気さえしていたのである。さすがに寒さが心配で根元には落葉や藁を敷き詰めたけれど、夜になると冷え込みが気になって、八時にダウンコートで身を固め真っ暗な外に出、更に落葉を重ねた。
　私は翌日から毎朝、真っ先に梅の苗を見に行くようになった。寒さは続き、蕾は委縮し、一番大きかったのは先端部がいくぶん茶色じみてきたので、私はやきもきした。

　連れ合いの娘南（みなみ）がやって来たのは、大地震から七日目の夜遅くだった。
　つい十日ほど前まで南半球にいたという彼女は日焼けで浅黒い顔をしていたが、目は不安そうで落ち着きがなかった。エスニック調のカラフルなスカーフで髪から頬まで覆い、大きめのマスクをかけ、手袋をはめ、大きな肩掛け鞄とボストンバッグを持った彼女は、玄関へ入ってくるなり、
「こんにちは。こっちは何にもなさそうですね。みんな普通の顔をしてる」
　と大きめの目を見開いて言った。

「そりゃまあ、だいぶ田舎だからね」
私がちょっと苦笑気味に答えると、バス駅まで迎えに行ってきた連れ合いが娘の後ろから説明するように言った。
「東京周辺は交通機関がだいぶ停まったり不規則で、駅も暗いんだって。非常時ふうなのね」
「そう、緊張してる」
南は自分もまだ緊張をとどめた口調で言い、コートを脱いで上るや洗面室へ直行して手と顔を洗いだした。そして更にスカーフまで洗い出していた。
私はリビングに入って少し怪訝顔をしていたのだろう。あとから入ってきた連れ合いが弁解するように言った。
「あの子、スカーフに放射性物質が付いてるかもしれないから、だって。だいぶ過敏になってるわねえ」
南はそのあとダイニングテーブル前に座って、連れ合いが出した夕食の残り物に向った。昼から何も食べていないそうだった。三時間のバスの中でもペットボトルの茶を飲んだだけという。
けれど、彼女は少し食べただけで食欲がないと言ってやめ、
「テレビ、テレビ」と言った。
テレビは全局で原発および地震津波災害ニュースをやっていた。原発情勢は全体としてじりじりと悪化しつつ、表面上は一進一退を繰り返しているように見えた。メディアも「専門家」と称する人たちも電力会社も政府機関も誰もはっきりしたことは言わず、曖昧に逃げている感があった。
「バカ、そこを言わんか、ちゃんと」
「まだそんなことしてるのか」
南と連れ合いが交互に声を上げた。さすがに親子はよく似ている。連れ合いは娘が来る前から似た反応はしていたが、二人になって更に増幅したようだった。
私はくたびれて先にベッドに入った。

翌日からリビングは一日の半分はテレビがついている印象になった。ついていない時は部屋の隅で南がパソコンのキーボードを叩いたり、スカイプ電話で外国の友人と英語で話したりしていた。外国では日本が地震と原発爆発で大変な状態と思われているようだった。彼女は去年の十二月から二ヶ月半南アフリカにおり、帰国後二日目にはオーストラリアに旅立ち、二週間後帰国して三日目に今回の大地震に遭遇したのだった。集団生活から一人暮らしに戻った途端の大事件だっただけに、不安と孤立感が一気に爆発したようだ。もともと感情表現は大きいタイプだったが、それが更に増幅されている。私たち初老夫婦と違って今三〇代後半、体もエネルギーも大きいだけに、醸し出す存在感も大きい。しかも外は放射線量がどうとか言って散歩一つろくに出ようとしないし、少しでも出るとすぐスカ

ーフまで洗って緊張しているから、屋内は狭く感じる。
　私はもっぱら外に出て畑仕事をした。北西と北側は既に済んでいたから、もう少しあとのつもりで置いてあった西側と家をはさんで東側の畑に鍬を入れた。といっても両方ともそれぞれ一畝ずつだから大した量ではないが、それをわざとゆっくりやった。畝を崩し、中に落葉堆肥類を鋤き込み、また土を戻し、消石灰を撒いた。気温はまだまだ寒かったけれど、汗をうっすらかき、気分がよかった。　庭のあちこちには春の芽吹きが次第に増えていた。水仙はもう十むらほどが芽を出しており、うち早かった四むらほどにはぷっちりした蕾が顔を出している。イヌフグリなどもう盛りだった。空色だった花が濃さを増してブルーになり、地面を小さな星のように覆ったりしている。山茶花は寒すぎて蕾がみんな落ちてしまったけれど、椿は着実に蕾を大きくしている。これは雲笠家からもらった若木で去年まではまだ花が咲かなかったが、今年はいよいよ三年目の正直で咲きそうな気がする。その雲笠家の庭には辛夷の蕾が随分大きくなっており、人の家のものなのに見るたび楽しみである。
　私は食事時などには出来るだけ原発とは無縁なことを南にたずねた。
「ソエトの人は何語を話すの？」
　彼女がいたのは南アフリカのヨハネスブルグ郊外にある貧しい黒人居住区ソエトだった。
「アフリカンス。オランダ語から出来た言葉」
　私は少し考える。確か「ボーア戦争」という昔世界史で習ったオランダ人とイギリスとの何回かの戦いがあった。ボーア人というのはオランダ系植民者たちのことだ。
「ソエトには白人もいるの？」
「ううん、みんな黒人。というかカラードといって少し混血した人たちがかなりいる。そのカラードや白人はアフリカンスを話すので、黒人もたいてい話す」
「英語は話さないの？」
「子供たちは習ってる」
「大人は？」
「知ってる人もいるけど、ズールー語とか黒人の言葉が多い。黒人の言葉はいくつかあるらしいけどお互いにだいたい通じるみたい。ジンバブエなんかでも通じるらしい」
「南君は何語で話していたの？」
「英語」
　私はまたしばらく考える。というかどういうことかよく分らない。それでは英語を使わない大人とはコミュニケーションが出来ないのではないか？　それとも少しは通じるということか。彼女は日本と南アフリカのミュージシャンたちと協力し、ソエトの子供たちに日本で要らなくなった楽器を渡してバンドを作るボランティア活動をしている。そういう関係者はおおむね英語が出来るのかもしれない。「ふーむ」とまだ考えていると、彼女は、
「こっちは東京より少し放射能値が少ないですね」
　と急に話を変えたりする。

「そうね、少し東京より遠いからかな。でも大差ない。東京は原発から二二〇キロで、ここは二六〇キロだから。風向きの方が影響するだろうね。
タスマニアはどんなふう？　アボリジニの島なの？」
ソエトのあとに行ったオーストラリアは、正確には本土から更に少し南のタスマニア島だった。そこに関して私は何も知らない。
「ええ。でもそんなに多くないし、みんな白いんです」
「えっ、白いアボリジニなんているの？」
私がかつて見たアボリジニの写真や映像はアフリカ以上に真っ黒な、まるで青銅色がかった印象さえあった。
「いるんです。アメリカにも外観は白人みたいな黒人ているでしょ。あれと同じ。アボリジニの血が入っているんでアボリジニ扱いされる」
オーストラリアでの先住民アボリジニ差別はひどかったらしい。イギリス植民地時代はカンガルーと同じように銃で狩の対象とされたりまでした。
「言葉は？」
「みんな英語」
ところが、その英語に分りにくい訛りがあって、前から調査に入っている日本の民族学者グループの英語堪能者たちが、誰もよく理解できない。南だけが理解できるというのだ。それで彼女は毎回通訳兼スタッフとして頼まれる。なぜ彼女だけ出来るのか当人も分らないと言っているが、幼年時代からイギリス、ついで青年時代はアメリカで育ったせいと、ある種の音感に秀でているのかもしれない。黒人や被差別者への愛も関係ありそうだ。
「アボリジニの言葉はないの？」
「昔はあったらしいけど、今はないみたい」
「ふうーん」
私は考えようとするが、ソエトの時みたいに次の質問がすぐ浮んでこない。言葉もなく外観も白人になってしまった先住民というものが、どうも頭の中で判然としないのである。
南はリビングの隅でヨガをすることもよくあった。彼女はヨガのインストラクターでもある。ヨガは連れ合いもよくやるから慣れているが、私は自分ではめったにしない。私は屋内で体を動かすより外で鍬やスコップを使う方が好きだった。
それで外へ出ると、屋内ではすぐテレビの音がしていた。
三日ほどすると、南はそのヨガもせず暗い顔をして肩に温湿布をしたりした。頭が痛いという。もうぼつぼつ収まるかと思っていた原発の状態が一向よくならないせいらしかった。敏感は優しさや愛も生むが、自分を痛めもするようだった。連鎖反応なのか、連れ合いまでが頭痛がすると眉をひそめて言いだした。まことに親子とは相似たものである。

何か地球や日本列島全体に異変でもあるのか今年は本当に寒い年で、三月下旬になってもまだ雪が降ったりした。積もりはしないが空気がビンと冷え、朝には霜柱が立った。

南は一週間いてから、いっそ外国へ行くかどうか考えるため東京へ帰った。あとはどこもすべて静寂そのものだった。有線放送が一度、厚生労働省職員を騙った振り込め詐欺が発生したとやけに大きな声で繰り返したほかは、鳥や風などの自然音以外何も聞えなかった気さえする。

鳥はアカショウビンやジョウビタキなどだ。素早いからなかなか姿を羽まではっきり見られないけれど、少しは見えるし飛び交う声は賑やかなくらいだ。だが、放射能は一向何も見えない。音もむろんない。自分はもう六十七歳だから、見えないものを気にするより見えるものを楽しんで春を迎えたい。あと十年生きられればそれでいいと本気で思ったりする。

そして三月三一日、庭の枝垂れ梅が三輪咲いた香りを顔を寄せてかぎ、クロッカスが二株実に明るい黄色の花を咲かせたのを見たあと、私は千曲川への森の径を下ってみようと思い立った。日も暖かかった。声をかけると連れ合いも一緒に行くと言った。

径の真ん中には合歓の一〇センチから二〇センチほどの薄緑色の若木が、まだ葉も芽もなく何本も生えていた。それは我が家にも沢山生えている。一昨年門を作る際、朽ちかけた合歓の大木をやむなく伐ったのだが、そのあと敷地内外に何十本と子木が生えてきたのである。工事関係者や御近所の話では伐る前年、その大木の花はひときわ多くきれいだったという。調べてみると、そういうのを「死に花」と呼ぶそうだった。木は死を本能的に察すると、大量に死に花を咲かせ種を生らせ、それを辺り一帯に撒き散らすらしい。私はその子木を何本も敷地内で支柱を立て育てているが、この径の若木たちもその兄弟であることはまず間違いないと思えた。

雪も全くなく寒い吹き上げ風もない径をゆっくり下りていくと、灌木類はもう芽が出かかっていた。楢やアカシアも心なしか枝先の色が朱みがかっている気がした。だが近寄ってよく見るとまだ芽の膨らみはほとんどない。

「まだかなあ、まだかなあ」

呟きながら樹間から見下ろすと、千曲川の中の島であるアカシア島だけは僅かに薄緑っぽいような気がした。

それで私たちはそこまで行ってみた。けれど、かなりの距離をぐるりと歩いてみてもアカシアの芽吹きはまだみたいだった。でも、確かに枝先の色が少し明るくなっているとは思えた。

私たちはそのあと、福島原発と同じ会社である「東京電力」の看板のかかった千曲川のダム上の細い橋を往復した。大きな鴨が数羽きれいな航跡を作って気持よさげに泳いでいた。しばらく眺めてから戻ることにし、上りの径にさしかかったところで、連れ合いがぽそりと言った。

「末世だから、これからは遊び暮らして生きようか」

「えっ、どういうふうに？」
彼女はしばらく答えを探していてから、首をかしげて自信なさげに言った。
「酒でも飲んで」
私はクスクス笑った。それなら私はとっくに実践している気がしたし、連れ合いはビールをコップに半分でもう飲めなくなる人だったからだ。
（連作の一）